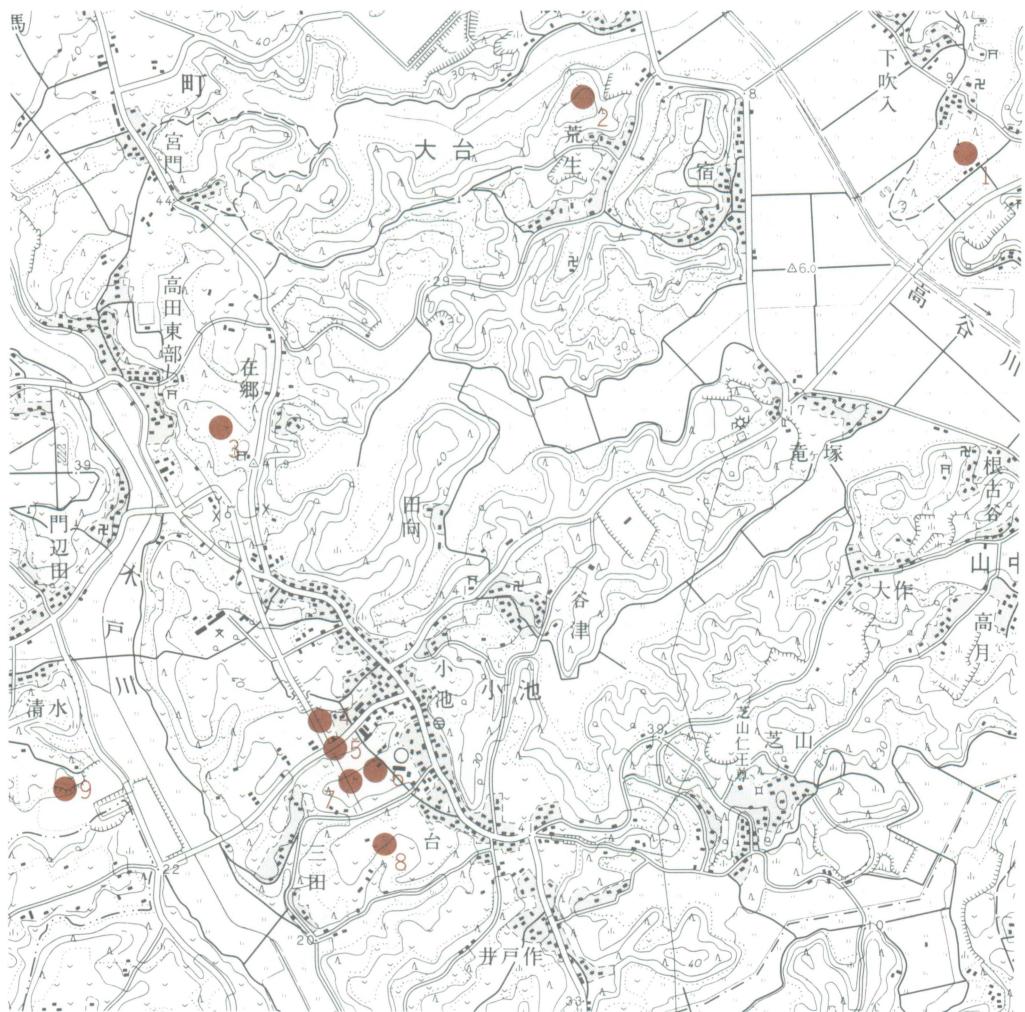


第3節 内面に記号状の赤彩が施される土師器坏について

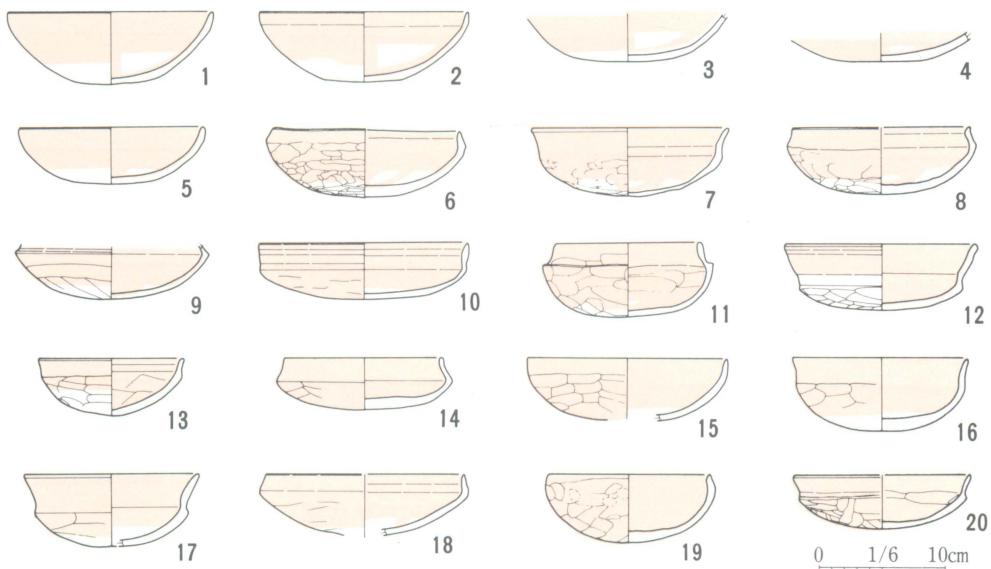
前節の時期区分で示したように、本地域の古墳時代の土師器坏は5世紀末から6世紀前葉をピークに赤彩がなされる坏が主体を占めるが、6世紀後葉に黒色処理、漆仕上げ土器が出現するとこれらや無彩の坏に凌駕され、6世紀いっぱい赤彩の坏はほとんど消滅する。このことは本地域のみならず若干の時期差はあるにせよ、上総地域に通有な現象であるといえる（長谷川 1989）。赤彩の坏には内外面全彩されるもの、内面が全彩、外面の下方が塗り残されるもの、内面の下方が塗り残され、外面が全彩されるものなど、外面内外面とも下方が塗り残されるもの、内面が全彩、外面無彩のものなどいくつかのパターンが存在する。それぞれが意識的に施されたものと思われるが、そのなかで特に目を引くのは内面（見込）に⊕や⊖状（形）の赤彩



第113図 ⊕・⊖状赤彩坏出土遺跡 (1/25,000)

- 1. 東台遺跡
- 2. 仲ノ台遺跡
- 3. 宮門遺跡
- 4. 小池地蔵遺跡
- 5. 小池地蔵II遺跡
- 6. 三田遺跡
- 7. 小池新林遺跡
- 8. 御田台遺跡
- 9. 清水台No.1遺跡

が施される壺の存在である。○状赤彩は御田台遺跡001（第42図1）・002（第43図14）・024（第55図204）・025（第57図222・223）号住居跡、⊕状赤彩は御田台遺跡033号住居跡（第59図255）、小池新林遺跡017号住居跡（第102図121）で検出されている。この種の赤彩の仕方は、東台遺跡（大賀 1988）、仲ノ台遺跡（瀧谷・荒井 1991）、宮門遺跡、小池新林遺跡（昭和54年調査区）、小池地蔵遺跡、小池地蔵II遺跡、三田遺跡、清水台N.O. 1遺跡（柿沼ほか 1980）など芝山町域の周辺の遺跡でも検出されている（第113図）。一方、県内の他地域では、管見によれば、成田市畠ヶ田花山遺跡D028号住居跡（田形 1988）で○状赤彩の壺が1点、八日市場市柳台遺跡234号住居跡（福間・神山ほか 1986）から○状赤彩が1点、佐倉市タルカ作遺跡第28号住居跡から⊕状赤彩と○状赤彩がそれぞれ1点ずつ（矢戸ほか 1985）、立山遺跡立山1号墳周溝内（金丸 1983）から⊕状赤彩の高壺が3点と●状赤彩の高壺が1点、大作遺跡4号墳から⊕状赤彩の壺が1点（藤崎 1990）、市原市中永作遺跡22号住居跡から○状赤彩の壺と○状赤彩の壺がそれぞれ1点ずつなどわずかに検出されているにすぎず、福間元氏が指摘するように（福間 1988）、芝山町域、木戸川・高谷川中流域にはかなり濃密に分布していると言うことができる。時期的には今回報告した資料では、前節の時期区分のII・III期に属するものが多いが、他遺跡出土資料をみると、最も古く遡るものは東台遺跡3号住居址出土土器（第114図1～5・第115図1）であり、この土器群にはTK208型式の須恵器壺蓋、高壺、聰、甕が共伴し、5世紀中葉まで遡るものである。反対に最も新しいものは仲ノ台遺跡23・48号住居址の○状赤彩の壺（第

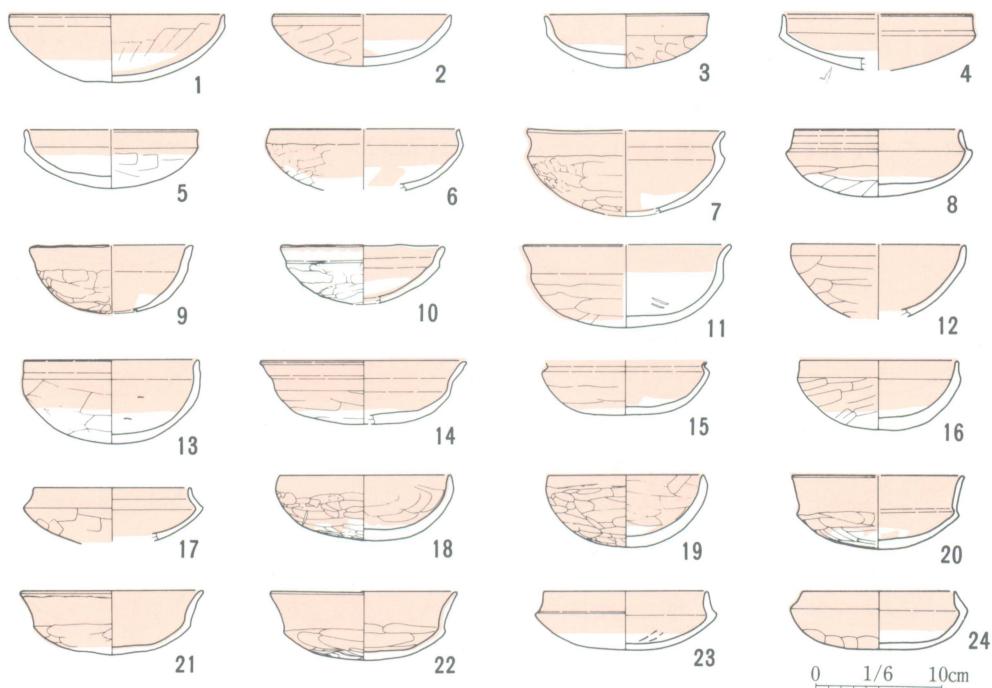


第114図 ○状赤彩壺集成図

- 1～5. 東台遺跡3号住居址 6・7. 宮門遺跡009号住居跡 8. 宮門遺跡015号住居跡
 9. 小池地蔵遺跡004号住居跡 10. 小池地蔵遺跡008号住居跡 11. 小池地蔵II遺跡002号住居跡 12. 三田遺跡013号址 13. 三田遺跡024号址 14. 三田遺跡034号址 15・16. 三田遺跡096号址 17. 三田遺跡104号址 18. 小池新林遺跡006号住居跡 19. 小池新林遺跡017号住居跡 20. 御田台遺跡034号住居跡

115図2・5)、三田遺跡017号址の \ominus 状赤彩の壺(第115図17)、小池地蔵II遺跡001号住居跡出土の \ominus 状赤彩の壺(第115図9・10)、御田台遺跡033号住居跡の \oplus 状赤彩の壺(第114図20)であり、これらは前節の時期区分のIV期に相当し、赤彩される壺がほぼ消滅するまで、長期にわたって存続していることが分かる。数量的にみると、一軒の住居跡で最も多く出土したのは東台遺跡3号住居址であり、 \oplus 状赤彩が施される壺が5点、 \ominus 状赤彩の壺が1点出土している。ほかに同住居跡からは単に赤彩が施される壺が20点、無彩の壺が4点出土しており、全体の2割を占めている。ほかの住居跡からは1点もしくは2点のみの出土であり、壺全体に占める割合は極めて少である。各住居跡をみてもこれらの壺が特異な状態で出土したものは認められない。形態では半球形のもの、口縁部が外傾するもの、直立するもの、内傾するものなど様々であり、 \oplus 状赤彩が施される壺と \ominus 状赤彩が施される壺それぞれについて形態の統一性は認められず、同一住居跡出土のものでも東台遺跡3号住居址出土遺物を除いて、細部形態が全く同一のものはない。よって、形態と赤彩の仕方の因果関係はないと思われる。

このように \oplus 状赤彩と \ominus 状赤彩は同時期でもそれぞれ単一の形態の壺に施されるのでなく、

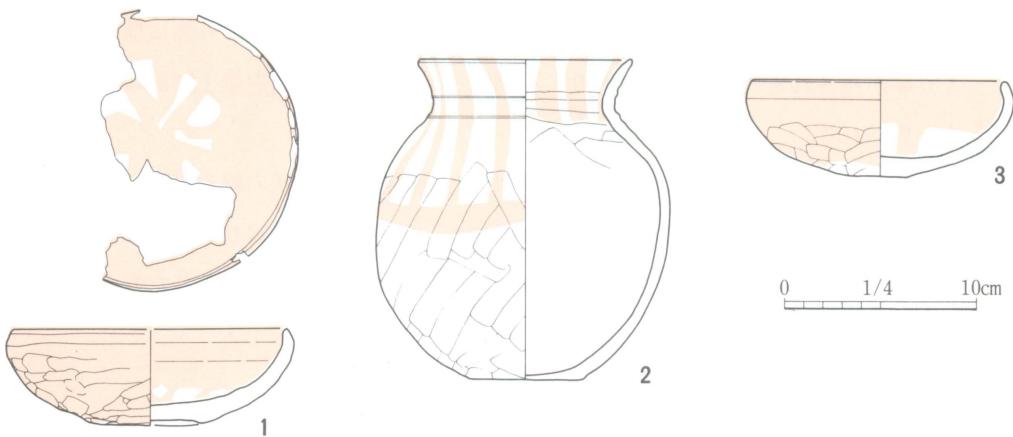


第115図 \ominus 状赤彩壺集成図

1. 東台遺跡3号住居址
2. 仲ノ台遺跡23号住居址
3. 仲ノ台遺跡43号住居址
4. 仲ノ台遺跡47号住居址
5. 仲ノ台遺跡48号住居址
6. 宮門遺跡015号住居跡
7. 宮門遺跡017号住居跡
8. 小池地蔵遺跡007号住居跡
- 9・10. 小池地蔵II遺跡001号住居跡
- 11・12. 小池新林遺跡002号住居跡
13. 小池新林遺跡004号住居跡
14. 小池新林遺跡005号住居跡
15. 小池新林遺跡006号住居跡
16. 三田遺跡011号址
17. 三田遺跡017号址
18. 御田台遺跡001号住居跡
19. 御田台遺跡002号住居跡
20. 御田台遺跡024号住居跡
- 21・22. 御田台遺跡025号住居跡
- 23・24. 清水台No.1遺跡第3号住居跡

様々な形態の壺に施されていることが分かるが、同時期における壺の形態差を生産者集団の差と捉えると、形態のバラエティと赤彩の仕方が結びつかず、赤彩の仕方がそれぞれの生産者集団を示す固有のものでないことになる。さらに全く同一形態を呈するものが少ないとから、同一形態の壺を生産する集団内において何らかの識別のために用いられた記号である可能性も低い。よって、 \oplus 状赤彩と \ominus 状赤彩が土器生産に関わる「ヘラ記号」的なものとは考えられない。^(註5)

赤色塗彩そのものは祭祀と密接な関連があると思われるが、先述したとおり、出土状態からはこれらの壺はを用いて祭祀などがなされた状況は窺うことができない。本地域では \oplus 状赤彩や \ominus 状赤彩が施される壺で東台遺跡3号住居址より古く遡るものは検出されていないが、5世紀前半に遡ると考えられる宮門遺跡016号住居跡、横芝町振子上遺跡（平岡 1983）遺構外出土の壺に内面に放射状の赤彩が施されているものがあり（第116図1・3）、また、振子上遺跡第1号住居跡からは、甕の口縁部内面から胴部外面中央にかけて縦縞の赤彩が施されているものがある（第116図2）。甕の赤彩の仕方が端的に示すように、これらは記号というより、より装飾的で何らかの祭祀もしくは呪術的な意味を込めたものと思われる。これらの壺の赤彩の仕方が系譜的に直接つながるものか定かではないが、 \oplus 状赤彩と \ominus 状赤彩を考えるのに示唆に富るものである。また、先に例にあげた佐倉市立山遺跡で古墳周溝内から検出された高壺は、明らかに古墳祭祀における供献土器として用いられたものである。また、参考例であるが、隠岐島の東笠根1号墳の横穴式石室出土遺物の中に、7世紀前半の合子状の須恵器壺の蓋と身の合計4点の外面に赤色顔料で十印が施され、また、同じ隠岐島の古墳時代後期の兵庫遺跡出土の土師器壺・高壺の底部外面には、鉄製工具によって円文の中に十字の線刻が施されており、出土状態は高壺の上に壺をのせたものを逆に倒置した状況で、祭祀遺物を含む遺物を廃棄した場所の一隅から検出されたという。これを検討した勝部昭氏は、十は「紐結び」を表し、結び目に



第116図 宮門遺跡016号住居跡(1)、振子上遺跡第1号住居跡(2)・調査区内(3)出土土器

靈魂が込められるという信仰があつたこと示すものとし、靈が遊離するのを土器の中に封じ込める意味があつたと解している（勝部 1980）。

以上、これまでみてきたところでは、現時点では \oplus 状赤彩と \ominus 状赤彩は土器生産に関わる記号ではなく、直接の根拠はないが、祭祀・呪術的な様相が強いものであると推察される。では、この赤彩方法は土器生産に関わる祭祀・呪術的な行為の所産によるものなのか、あるいは使用者側の要求によって施されたものなのであろうか。立山遺跡は後者であると思われ、隱岐島東笠根1号墳・兵庫遺跡は使用者によって施されたものである。しかしながら、両者とも本地域における出土状況とは異なることから、現段階ではその意味を即断することはできない。そのことに関連して、木戸川・高谷川中流域に集中して分布するという理由について前者の見解をとるならば、 \oplus 状赤彩坏と \ominus 状赤彩坏を生産する集団の供給圏を示すと言えるし、後者の見解ならば、当該地域において \oplus 状赤彩坏と \ominus 状赤彩坏を用いた祭祀が盛行したと、現時点では言うことができよう。今回の検討では、結論めいたことは何も言えず、 \oplus 状赤彩と \ominus 状赤彩の示す意味や両者の性格の違いを見い出すこともできなかった。今後の課題としたい。

註1 小池地蔵遺跡、小池新林遺跡、三田遺跡は芝山町の埋蔵文化財分布地図（芝山町教育委員会 1982）では一つの遺跡（宮郷台遺跡）として把握されている。

註2 芝山町立芝山古墳・はにわ博物館福間元氏の御厚意により、実見、再実測させていただいた。

註3 静岡県湖西窯跡群では陶邑編年のTK43型式に対応する第II期第3小期から天井部と口縁部の境に稜や沈線を施さない須恵器坏蓋が出現し（後藤 1987）、これと時期的に対応する。

註4 水系的には高谷川水系に属するが、横芝町東長山野遺跡（道澤ほか 1990）ではグリッド出土資料で、内面口縁部下に連弧暗文、体部内面に放射暗文、外面に横方向のヘラミガキが施される坏が出土しており、実測図を見た限りでは畿内産土師器の坏CIになると思われる。

註5 土師器にも須恵器の「ヘラ記号」と酷似した焼成前の記号状の線刻が稀に認められる（第43図15など）。「ヘラ記号」は中村浩氏によって検討されており、複数工人（群）が同一の窯を共同に使用するに際して、類似製品の区別のために使用されたものであるとされている（中村 1977）。

引用・参考文献

新井順二 1986『御田台遺跡発掘調査報告書』 芝山町御田台遺跡調査会

- 大賀 健 1987『下吹入遺跡群』 下吹入遺跡群調査会・芝山町教育委員会
- 奥田正彦 1985『主要地方道成田松尾線』II 財団法人千葉県文化財センター
- 小澤 洋 1992「上総地域の鬼高式土器」『月刊考古学ジャーナル』NO.342 ニュー・サイン
ス社
- 柿沼修平ほか 1980『清水台N.O. 1遺跡発掘調査報告書』 清水台N.O. 1遺跡発掘調査会
- 勝部 昭 1980「十印のある土器」『古代学研究』94 古代学研究会
- 金丸 誠 1983『佐倉市立山遺跡』 財団法人千葉県文化財センター
- 小杉秀雄・佐藤俊雄 1956「芝山古墳群小池第一号墳」『古代』第21・22合併号 早稲田大学考古学会
- 後藤建一 1987『西笠子第64号窯跡発掘調査報告書』 静岡県湖西市教育委員会
- 酒井清治 1981「房総における須恵器生産の予察（I）」『史館』第13号 史館同人会
- 芝山町教育委員会 1982『芝山町の遺跡』
- 瀧谷 貢・荒井世志紀 1991『大台遺跡群』 財団法人山武郡市文化財センター
- 白井久美子 1991『千原台ニュータウンIV 中永作遺跡』 財団法人千葉県文化財センター
- 田形孝一 1988『成田市畑ヶ田地区埋蔵文化財発掘調査報告書』 財団法人千葉県文化財センター
- 高橋賢一・伊藤智樹 1986『主要地方道成田松尾線』IV 財団法人千葉県文化財センター
- 滝口 宏ほか 1970『千葉県山武郡芝山町小池台遺跡調査－第一次概報－』 芝山町教育委員会
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群』 I 平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』 角川書店
- 千葉県教育庁文化課 1990「小池木戸脇遺跡」『千葉県埋蔵文化財調査抄報－昭和63年度－』
- 中村 浩 1977「須恵器生産に関する一試考」『考古学雑誌』第63巻第1号 日本考古学会
- 西 弘海 1976「平城宮出土土器の編年とその性格」『平城宮発掘調査報告』VII 奈良国立文化財研究所
- 萩原恭一・小林信一 1988『東金市久我台遺跡』 財団法人千葉県文化財センター
- 長谷川厚 1989「神奈川・千葉県地域の赤彩土器・黒色処理土器について」『東国土器研究』 第2号 東国土器研究会
- 林部 均 1986「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学雑誌』第72巻第1号 日本考古学会
- 平岡和夫 1979『成田用水』 高田権現・大台西・上吹入・林遺跡調査会
- 平岡和夫 1983『東京電力送電線鉄塔建設事業地内八日市場線発掘調査報告書』 東京電力山武・横芝町遺跡調査会

- 平岡和夫 1989『千葉県九十九里地域の古墳研究』 山武考古学研究所
- 福間 元・神山 崇ほか 1986『飯塚遺跡群発掘調査報告書』 八日市場市教育委員会
- 福間 元 1988「古墳時代後期の赤彩土器について（序）」『竹籠』第5号 北総たけべらの会
- 福間 元 1989『三田遺跡発掘調査報告書』 芝山町教育委員会
- 藤崎芳樹 1990『佐倉市大作遺跡』 財団法人千葉県文化財センター
- 萬崎博昭ほか 1983『主要地方道成田松尾線』I 財団法人千葉県文化財センター
- 道澤 明ほか 1990『東・北長山野遺跡』 北長山野遺跡調査会
- 渡邊高弘ほか 1991『主要地方道成田松尾線』VI 財団法人千葉県文化財センター